

Title	バビロニアの洪水傳説とギルガミシュの史詩
Sub Title	
Author	森, 馨(Mori, Kaoru)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.1 (1930. 3) ,p.127- 152
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300300-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

バビロニアの洪水傳説 とギルガミシュの史詩

はしがり

本稿は大英博物館エジプト・アッシリヤ考古部主事E・A・W・パッチ氏の小著 *The Babylonian Story of Deluge and the Epic of Gilgamesh*. British Museum. 1920. の譯である。元來原著は同博物館を訪れる旅行者の爲めに書かれた平易を旨とする案内書ではあるが、此の種の傳説を記述紹介せるものとしては、最も出色のものである。嘗て昭和三年度間崎教授の講ぜられし「古代東方史」の聽講リポートとして提出した翻譯を、今同教授の御徳憑により、旁此の方面の研究に志す初學者への參考にもと考へ爰に掲載する次第である。但し同書の挿畫と註の多くは都合上省略することゝした。

一、レヤード、ラッサム及びスミスの

土版文書の發見

「一萬六千有餘の右左を辨へざる者と、それに數

バビロニアの洪水傳説とギルガミシュの史詩（森）

多の家畜とあるこの大いなる府^{マチ}（舊約全書ヨナ書四、十一）古のニネヴェ市の遺址のうちに、一八四五年より同四七年にかけ、又一八四九年から同五一年にかけて、幾回もの發掘事業が、（後ちサー）エー・エッチ・レヤード氏の手によつて行はれた。ニネヴェ市の遺址はチグリス河の左岸、即ち東岸に存し、ササン人によつて建設せられた町で、西ニネヴェの舊き敷地の區劃を示してゐる Al-Mawasil 即ち Mosul モースルの町の丁度對岸に當つてゐる。初め、レヤードは此等の遺址をニネヴェの跡とはせず、アシニールの建設した市の、いづれか一つの遺址（舊約全紀^{十、十一}）に當るもので、ニネヴェの遺跡は反つて此地から約二十哩下方なるニムルドに存在する

ものであらうと考へた。然し彼の豫測は誤りであつた。基督教徒、羅馬人、回教徒の傳説によつて、ニネヴェの遺址はモスールの對岸に存することは今や疑問の餘地なく、又一般に知られて來た所である。即ち七世紀にアラビヤ人が此地に建てた堡塞は「Kal'at Nina wi」即ち「ニネヴェの堡」として數百年の間知られ、アラビヤ人の地理學者はすべて皆等しくモスール對岸の土丘のうちに、ニネヴェの王宮や城壁の遺址が残存してゐると云つてゐる。彼等の多くは此等の土丘のすぐわきに、「Tami Nabi Yunis」即ち「圍るに三日を要する大都市」(三、三)ニネヴェの住民に、豫言者ヨナが悔改を説いた丘の存することをも、誤なく推測し得たのであつた。此の地方に存する傳説も亦ヨナの此丘に埋葬せられし事を傳へ、その墳墓と稱せられるものも、今日に到る迄、此の所で觀覽に供せられてゐる。

二、ニネヴェの城壁及諸王宮

ニネヴェの諸王宮の遺址の位置は Commander

Felix Jones, I. N. の作成した同市地圖によつて知る事を得る。サルゴン二世(前七二一—前七〇五)センナケリブ(前七〇五—前六八二)及びエサルハドン(前六八二—前六六八)の建築にかゝる宮殿の遺蹟はナビ・ユーニス(前六八二—前六六八)の土丘の中に存し、アシュル・バニ・バル(前六八二—前六二六)によつて此等の後に建てられた王宮其他の建築物の遺址は此地方で「タル・アル・アルムシャー」即ち「アルム・シユの丘」及び「クエーンジク」の名を以て知られてゐる土丘の下に埋没してゐるのである。「クエーンジク」の名は、早春此の土丘の彼方此方に牧草を求めて歩く羊の大群になぞらえて、「多くの羊」を意味するトルコ語の二つの單語から出でたと謂はれてゐるが、此等二つの大土丘は、ニネヴェの大なる西城壁の遺蹟に接して横はつてゐるのである。最後のアッシリア帝國の時代に於ては、チグリス河はこの西城壁の下を洗つてゐたのであつたが、この河流はいつの間にか移り變つて、今ではこの城壁から一哩以上も遠のいてゐる。カウスル(Khausur)即ち「ホゼル」(Khosar)河は、ニネヴェの面積を二分し、クエーンジクの南端のすぐ下を流れ

てチグリス河に注いでゐる。ニネヴェの城壁の遺蹟によれば、その長さはそれ／＼東城壁は一萬六千呎、北城壁は七千呎、西城壁は一萬三千六百呎、南城壁は三千呎、都合城壁周圍の全長は約一萬三千二百碼、即ち七哩半に亘つてゐた事が知られる。

三、ニネヴェに於ける神ニボの寺院 の文庫の發見

一八五二年の春、レヤードは、エッチ・ラッサムの助けを得て、クエーンジクに於ける「西南宮」の發掘を續け、この建物の一部に互に相通ずる二個の小房を見出して、これを「記録室」或は「文書の家」と呼んだ。この名を得たのは此の二個の部屋には銘刻のある素焼の土版及びその破片を以て、床上二呎有餘の高さに全面堆積されてゐたからである。完全なる土版も若干は存したが、その大部分は碎かれて破片となつてゐた。之は恐らくニネヴェがメヂヤ人とバビロニヤ人の掠奪と放火に遇つた時、この建物の天井及び壁の上部の崩落せるために粉碎せられたものであらう。二室の中に

藏せられてあつた土版は幾千を以て數へられた。且つレヤードが此處で發見したものの外に、その後猶多くの土版がこの二室を横切つて河へと續く廊下に沿ふて掘り出された。また可成多數のものが、當宮殿の放火せられた際に、驚いて逃げ出した人々の足で、前面の河の中に蹴り込まれたのであつた。レヤードの發見した土版はその大さが種々であつて、最大のものは、一方が平たく他方が凸形である矩形狀のもので、九吋に六吋半であり、最小のものは約一時平方のものであつた。この「出土品」の甚だ重要である事は、その當時は充分に認められなかつた。それ故此等の土版は裝飾のある土器であると思はれ、籠に投げ込まれて、充分な荷造もされず筏に積んで河を下り、バスラに運ばれ、その地から英國の軍艦に託して英國に發送せられたのである。そして此の荷造包装の不完全の結果は、ニネヴェから英國への輸送途上、嘗てメヂヤ人から損傷せられた以上に、この土版に損害を、蒙らしめることとなつた。二室中で發見せられた完全な土版の中、數個のものは之に銘刻或

は搔記せられた奥書^{コロフォン}が存したので、其の後これが
ロトリンソン、ヒンクス、オペール等によつて解
讀せられるに及び、始めて之等はニネヴェに於け
る神ネボの寺院に存した文庫の一部分を形造つて
ゐたものであることが明瞭となつた。

四、神ネボとニネヴェに於けるその文庫

ニネヴェに於ける神ネボの寺院の文庫に關する
古い歴史については何も知られてゐない。然しこ
の文庫がサルゴン二世の治世に於て既に存したこ
とは殆んど疑はれない。さうして、その創立は恐
らくニネヴェから約二十哩の下流に存するニムル
ード<sup>(創世紀、十、十
一に所謂カラ)</sup>に住し、神ネボに仕ふる僧等の
提唱によつたものであらう。バビロニヤ以前の時
代に、神ネボに、賦與せられてゐた性質について
は、學者の間に異論があり、其が水の神であつた
か、火の神であつたか將た穀物の神であつたかは
決定せられないが、只神ネボはその子としてか、
或は同列の神としてか、兎に角神マルヅクに關係
のあつた事については疑の存せぬ處である。

既に前二千年頃には、彼は明かにバビロニヤの
「大神」の一人と目され、約千二百年の後、その禮
拜がアッシリヤに於いて一般に行はれた。前九世
紀にはニムルードにその寺院を存し、アダド・ニラ
リ王^(前八一—七八三)はこの神の爲に、その寺院の中に六
個の像を設置した。この中の二個は現在大英博物
館に保存されてゐる。最後のアッシリヤ帝國の治
下にあつては、ネボは總ての神々の睿智を集めた
「至賢」「全智」の神と信ぜられた。又ネボはあらゆる
學問技藝の發明者であり、學者賢者の靈感の本
源であり、文學と書法に關する總ての祕密に通曉
したる人、神なる史生であつた。アシュル・バニ
バルは彼を「天地の衆生を統べ治むる者、智識の土
版の保持者、運命の蘆筆の所持者、日々を長むる
者、死者に生氣を與へる者、惱める者に光を與ふ
る者、仁慈なる子、ネボよ。」と呼んだ。ネボの寺
院の文庫は、サルゴン二世の治下に於ては、恐ら
くナビ・ユーニスか又はその附近に、或は又ジョ
ージ・スミスの考へた如く、クエーンジクの附近、
又はクエーンジクそのものに存した、ある建物の

中に收められたのであらう。そしてレヤードは「西南宮」の中に神ネボの文庫を見出したのであるから、多分アシュル・バニ・バルは「西南宮」の中に神ネボの爲めに新しい寺院を建立し、この中に文庫を移さしめたのであらう。そしてこのニネヴェに於けるネボの寺院はボルシッパ（近代のビルス・イ・ニムルード）に於けるその太古の寺院と同じ名「エ・ジダ」と呼ばれたのであつた。

五、アシュル・バニ・バルの王宮の文庫の發見

一八五二年の春、レヤードは資金缺乏のためにその發掘を中止するの餘儀なきに至り、クーンジクの大土丘の北半分を全く未了のまゝにして、ラッサムを連れて英國に歸り、大英博物館の當事者に發掘主事の辭職を申出で、バグダード駐在の總領事（後ちサー）エッチ・シー・ローリンソン大佐が後ち行はるべき以後の發掘を指導することとなつた。同年の夏、大英博物館の當事者は國會よりアッシリヤの發掘續行を許可せられ、且つラッサ

ムを派遣してクーンジクの發掘を完成せしめんとした。之は彼が發掘の目的を以て地主より得たるクーンジクの土丘の借地權の期限が猶ほ數年を餘せるためであつた。然るにラッサムは、一八五三年モスールに着き、人夫を募集したるに、偶、彼は自己の保有せる借地權について何等知る所のなかつたローリンソンが、既に此の土丘の北半、即ちラッサムが、大英博物館のために發掘を行はんと切に願つてゐた部分の發掘を佛國領事プラスに許可して了つてゐることが分つた。彼は異議を唱へたけれども容れられなかつた。彼は、プラスがローリンソンより得たる言質に據つて、あく迄發掘權を抗爭せんとする意向なるを知つて、嘗て一八五二年にレヤードが試みた「西南宮」の部分、掘り出すこととした。然るに此の間、プラスはサルゴン二世の大宮殿の遺址を埋藏してゐる土丘、コルサバッドに於けるフランスの發掘事業に忙殺されてゐたので、クーンジクの發掘を始め餘裕がなかつた。かくして、一年は経過したが、プラスはクーンジクの發掘を爲さんとする氣配

を見せず、加之ラッサムの本國歸還の期も間近く

なり、又クレーンジクの土丘の地主は早くその發掘を終了せしめて、この丘上に再び家畜を放牧したかつたので、ローリンソンのプラスに與へし約束あるに拘らず、發掘を開始する様にラッサムに迫つた。丘の地主とラッサムは夜間祕密にこの丘の北の部分に發掘すべき協定を整へ、一八五三年十二月二十日にその事業は着手せられた。最初の夜には何も重要なものは發見されなかつた、二日目の夜には大きな薄肉彫の一部が出土し、三日目の夜には大きな土塊が崩落したその跡に、アシュル・バニ・パルの戰車に立てる光景を彫刻した、誠に美しい薄肉彫が出土された。此の發見の報道は忽ちに四隣に傳へられ、その發掘を最早祕密にする事が出来なくなつたので、この事業は晝間公然と續行せられた。この薄肉彫は室内に張られた一組の彫刻物中の一個をなすものであつて、長さ五十呎、幅が十五呎あつて、王の獅子狩を示してゐる(一)。此の一組の薄肉彫は宮殿火災の時、火を免れたものの全部であつて、現在總て大英博物

館に保存せられてゐる。

人夫等は、「獅子狩の間」を掘り出してゐた間に、銘刻せられた素焼の「あらゆる形狀、容積」の土版の數個の堆丘に掘り當てた。之はレヤードが前年、「西南宮」で發見した土版に外見の類似せるものであつた。此の土版と一緒に又はその附近に、土版が組織的に整頓されて「獅子狩の間」に藏有せられてゐたことを暗示すべき遺物は一つもなく、寧ろこの殆んど總てが壞れて破片となつてゐる所から見て、之等は他の場所から運搬されて、火急に投げ出されたものであるかの如く見られ、且つそのある者は非常な熱を受けた痕があるので、此等は宮殿の火災の際にこの部屋にあつたに相違ないことを示すのである。この土版が英國に運ばれて、ローリンソンの手によつて調査された所、奥書を示す所によつて、此等はアシュル・バニ・パル王がその宮中に存置したかの大きなアシュル・バニ・パルの私文庫の一部を爲すものであることが發見せられた。一八五二年レヤードにより又一八五三年ラッサムによつて發掘せられた是等の土版は、現

在大英博物館に於ける楔形文書の無二の廣大なる蒐集を形造れるもので、今日「クーンジク・コレクション」と通稱せられてゐるものである。此等クーンジクから採集されて今日大英博物館に藏有せられる銘記ある素焼の土版及びその破片は約二萬五千七十三點に達し、宗教的、歴史的、文學的見地よりしてその價值及び重要性は頗る大である。加之、此等はアッシリヤ、バビロニヤ、スメルの諸語を以てせる楔形文字記銘を解讀すべき資料を提供し、最近七十年間にさしも顯著な成功を收めて確立せられたアッシリヤ學に、その基礎を與へたものである。

(1) 此等の薄肉彫は、獅子がニネヴェの檻の中に繋かれ引き出されて親しく王自からの手によつて殺される所を示してゐる。ナホムが次の言葉を以てせるは檻の中の獅子について説けるものゝ如くである。彼は即ち曰く、「獅子の穴は何處ぞや、小き獅子の物を食ふ處は何處ぞや、雄獅子、老いたる獅子すらも、それに小獅子の彼處に歩むに、之を懼れしむるものなし。」(ナホム書二、十一)

六、書籍蒐集家及び學問の保護者、

バビロニヤの洪水傳説とギルガミシユの史詩(森)

アシウル・バニ・バル

アシウル・バニ・バル(エズラ書四、十に)は、前六六八年に父エサルハッドンに繼いで王位に登り、その治世中比較的早き時期に、その國の歴史の研究と、一大私文庫建設のために専念せるものの如くである。現存する土版によれば、彼はその以前の王の誰よりも大なるネボの寺院の文庫の保護者であつたのみならず、彼自身教養のある人士であつて、學問を愛し、當時の文筆の士に對しての擁護者であつた。大英博物館所藏の、彼の大なる十面圓鑄の上に刻まれてゐることが發見せられたアシウル・バニ・バルの年代記の序文中に、嘗てセンナケリブやエサルハッドンが住して、アッシリヤ帝國を統治したこの同じ宮殿に起居する彼の生活述べ、更に彼自らの教育を説明して、次の如く云つてゐる。「吾れアシウル・バニ・バルはその中(宮殿を指す)にあつて、ネボの叡智、あらゆる技術家の、凡ゆる種類のすべての書法を解し、自らその總て、即ち書法のあらゆる種類の達識となれ

り」。

此の言葉はアシウル・バニ・バルが楔形文書を解讀し得たのみならず、熟練せる史生の如く文字を書くことも出来、且つ土版を作り、焼くことの技術に關する總ての細事をも知れる事を示してゐる。彼はその宮殿の中に文庫を作る決心をして、組織的に文献を蒐集する仕事を開始した。史生を古の諸學府、即ちアシウル、バビロン、クター、ニブール、アッカド、エルクの諸市に派し、その地方に残存せる古書の寫を作製し、之がニネヴェに着くのを待つて、親しく王宮文庫のために副本を作り、又史生をして之を作らしめ、このいづれの場合にも副本を文庫に收める前に、自ら文字を、校合、改訂してゐる。この文庫から出る土版の外見は彼が特に工場を設けてその中で粘土を精製せしめ、之を捏ね、同じ種類の恰好よき土版を作り、又窯を作つて土版に文字を刻んで、之をその中に焼かしめたものであることを示してゐる。土版の上の字體の揃つてゐる事は頗る著しく、誤字のある文書は殆んど發見せられない。土版が

文庫中にどういふ風に整理されてゐたかは解らぬけれども、確かに土版の集團に對しては目錄が作られ、土版のあるものには附票が附せられた。各々の集團は一組の第一版には第二版の第一行を記し、第二版は第三版の第一行を記すると云ふ様になつてゐる「繫字句」を附して、更に幾多の組に整理されてゐた。

アシウル・バニ・バルは約前三五〇〇年以來、下バビロニア地方を占有してゐた非セム族のスメル人の文學に非常な興味を有してゐた。彼とその史生は、あらゆる種類の記號、單語、物品の對語表を作つた。この對語表は總てスメル語、アッシリヤ語の今日の研究者にとつて無上の價值を有するものである。此等の對語表中普通説明の施される記號は中央行に、スメルの原音(Valne)は左行に、そのアッシリヤ語の意味は右行に記されてゐる。又彼の多くのスメルの頌歌、呪文、魔術の唱句等彼の寫の多くに、アシウル・バニ・バルはその行間にアッシリヤ語で解釋を挿入せしめた。かくの如き對語の文書については、「七惡靈」に關する

正文の援抄を參考とするならば、その第一、三、五等の奇數行はスメル語で書かれ、第二、四、六等の偶數行はアッシリヤ語で記せられてゐるのである。

アシュル・バニ・バルの私文庫の土版とネボの寺院の文庫とに屬してゐる土版とは、その奥書の存する場合は、之によつて識別することが出来る。即ち土版の此の二大蒐集の各類別を示す二個の奥書は知られてゐるのであつて、その一つは短文で他は長文である。アシュル・バニ・バルの王宮文庫の短文の奥書は「衆生の王、アッシリヤ國の王なるアシュル・バニ・バルの宮」とあり、ネボの文庫の土版の上には「衆生の王、アッシリヤ國の王なるアシュル・バニ・バルの〔國?〕」とある。長文の奥書は大に興味のあるものであるが、その二つの代表的の例を爰に譯出する事とする。

(一) 王宮文庫の土版の奥書

一、衆生の王、アッシリヤ國の王なるアシュル・バニ・バルの宮殿

バビロニアの洪水傳説とギルガミシユの史詩(森)

- 二、彼は神アシュールと女神ベールットを信じ、
- 三、彼に神ネボ(ナブ)と女神タスメトは、
- 四、(賦興したり)、總てを聞き得る耳と、
- 五、見えざる所なき眼の所有と、
- 六、書法の最も見事なる結果を、(賦興したり)
- 七、こは彼の前なる諸王の中
- 八、その一人だにこの技藝に達したるものなきところ。
- 九、あらゆる種類の、書き物の「中に表はされし」ネボの睿智を、
- 二〇、我は土版の上に記し、校合し、改訂せり。
- 二一、「而して」調査と讀書の爲めに、
- 二三、我が宮殿の中に我は之を置けり、——「我は」
- 二三、是、諸神の王アシュールの光を知る君なり。
- 二四、何人にもあれ、「是等を」を持ち去り、又はその名を我が名と並べて、
- 二五、記せんとする者あらば、願くは神アシュール及びベールットよ、怒をもて、
- 二六、之を掃ひ去り、且つ其の名、其の種を地に

壊ち給へ。

(二) ネボの文庫の土版の奥書

一、(ネボ、)仁慈なる子、天地の衆生の指揮者、
二、智識の土版の保持者、運命の蘆筆の所持者、
三、日々を長むる者、死者に生氣を與へる者、
悩める者に光を與へる者(なるネボ)へ、

十四、アシニール、ベール、ネボの神々より認め
られたる者、主、(貴きアシニール・バニ・バル、
大君より)

五、羊牧ふ者、大神等の聖所の維持者、それら
の収益を護る者、

六、衆生の王、アッシリヤの王なるエサルハッ
ドンの子、

七、衆生の王、アッシリヤの王なるセンナケリ
ーブの孫(なる大君アシニール・バニ・バルより)

八、その靈の生命、その生涯の長さ「及び」その
子孫の幸福のため、

九、その王位の礎の不朽にして、その祈願の聞
かれ、

一〇、その請願の容れられ、叛ける者をその手の
中に救ひ出さんことを。

二、いと尊き僧、指導者たるエアの睿智を、
三、大神等の心を充す爲めに作られた所のもの
を、

四、アシニールとアッカーダの地の總ての土版
に照して(逐字的に)

三、我は土版の上に書き、(逐字的に)校合し、改
訂し、

一五、而して我はニネヴェなる我が主ネボの寺院
エ・ジダの文庫に藏せり。

一六、オ、天地衆生の主なるネボよ、喜びもて、
幾年も(即ち永久に)その文庫を見守り給へ。

一七、首領にして汝の神徳を拜するアシニール・バ
ニ・バルの(文庫を見守り給へ)我は日々その爲
めに牲を献げん――

一八、かくして汝の偉大なる神徳を崇めんとする
は、我が終生の信條なり。

以上兩文庫からの土版の完全なるものは、その
大さ十五時に八吋八分の五から、一時に〇吋八分

の七のものに及び、厚は普通一吋程である。形状は矩形で表面は平で裏面は稍、凸形である。契約、書信、及び「判例」の土版は之等よりも甚だ小さく、その形は小さな西洋の枕に似てゐる。此等の土版中に取扱はれてゐる主要なる題目は、編年的又は記事要約的の歴史、書信、急信、報告、神託、祈禱、契約、土地賣買の證文、物産、家畜、奴隸、約定、婚姻、持參金、利息證文（之には印章、爪印捺さる）年代學、年代表、年番名簿、占星學（豫測、前兆、卜占、護符、呪文、祈禱）神話、傳説、文法、法律、地理等である。

七、ギルガミシュの史詩と洪水傳説に

ついでにジョージ・スミスの發見

レヤードとラッサムによりニネヴェに發見された多量の土版は一八五四年より翌年にかけて大英博物館に到着し、間もなくローリンソンとノリスの手によつて、その調査が始められた。此の際、土版の下寫し及び謄寫に巧な、嘗てローリンソンの楔形文書の復寫を石版にして出版せる折に、版

パピロニアの洪水傳説とギルガミシュの史詩（森）

圖轉寫に當りしパウラーが對語表、字音表、其の他の可成り多數の破片を接合したが、此等のものは一八六六年の Cuneiform Inscriptions of Western Asia の第二卷に發表されてゐる。更に此の年大英博物館の當事者はジョージ・スミスをして、ローリンソンを助けて破片の整理、分類、接合の仕事に當らしめ、彼によつてこの蒐集の包括的な調査が開始せられた。アッシリヤ學に對するスミスの個人的興味は歴史文書、殊に聖書の記事に何等かの光明を投ずべき文書に傾倒された。然し彼がサルゴン二世、センナケリブ、エサルハドン、アッシュル・バニ・パルの戦争物語を穿鑿する間に、彼は他の重要な文書の中に、（一）エレクの古王ギルガミシュの冒險を記した土版中のある部分の記事の一组、（二）ギルガミシュの傳説の第十一版に記された（一種より多く）の洪水記録、（三）天地創造の詳細な記述、（四）タムズを求めて天よりハデス（地獄）の中に降つたイシュタルの傳説等を發見した。此等の文書の大意は頗る明瞭であつたが、其の間には多くの空隙があつた。ジョージ・スミスがギ

ルガミシユの傳説と、「カルヂヤの洪水傳説」の譯文を公刊したのは、一八七二年十二月に至つての事であつたが、彼の論文に挑發されたる興味は一般に傳はり、「デーリー・テレグラフ」社主は、ミスをして直にニネヴェに赴かしめ、その文書中の空隙を充たすべき土版の失はれたる破片を探求せしむべきであると主唱し、發掘費の中に一千ギニー(約一萬五百圓)の寄附を申出でた。大英博物館の當事者は此の申出を受諾し、ミスに六ヶ月の外遊許可を與へたので、彼は一八七三年一月に倫敦を發し、三月にモスールに到着した。その五月には、彼はクーンジクから「カルヂヤの洪水傳説の第一段に屬して、その物語の重大な空虚をなせる唯一の場所に當てはまる原文の十七行の大部分を包含する」破片を掘り出した⁽¹⁾。一八七三年及び同四年にミスはクーンジクに彼の行へる發掘中に土版の多くの破片を掘り出したが、之等の文書は彼をして「ギルガミシユの物語の十二土版」の内容についての彼の説明を完成することを得さしめ、又この彼の説明の中には、洪水傳説の

譯文をも加へたのであつた。然し不幸にしてミスは一八七六年アレppoの附近で饑餓と病患のため死したので、その初期の出版を改訂し、且つ彼の最後のアッシリヤ及びバビロニア地方の旅行に得た知識を以て之を増補することが出來ずに了つた。けれどもミスの不慮の死後、大英博物館當事者によつて、クーンジクに行はれた發掘事業の結果は、更に數百枚の土版とその破片が發見せられ、その多數は舊來の蒐集品中の土版に加へられた。かくて新舊資料の注意深い研究と調査によつて、最近四十年間にアッシリヤ學者等はギルガミシユと洪水の傳説中の多くの原文章を恢復し、完成することを得たのである。猶洪水傳説は元來ギルガミシユ傳説と何等の關係を有せず、唯後世の該傳説編輯者の手によつて、アシュル・バニ・バルの時代に書かれた十二土版の數を恐らく完全にせんとするがために、之に挿入せられたものであることは今や明白となつた。

(1) Smith, *Assyrian Discoveries*, London, 1875, p. 97.

八、バビロニアに於ける洪水傳説

スミスが一八七二年十二月に聖書考古學會に於いて朗讀發表し、翌一八七三年に刊行した「カルデアの洪水傳説」に關するその論文の序文中に、彼がアシュル・バニ・バル王の土版に發見したアッシリヤの洪水記事は、下バビロニアのエルクに於ける原文から轉寫されたものであると彼は説いた。即ち彼の考ふる所によれば、此の原文は「非常に古い時代に、セム系バビロニア語で書かれたもので、さもなければ之に譯されたもの」であつて、彼はその年代の比定は出來なかつたが、この議論を支持するために幾多の尤なる例證を列舉した。最初にこの傳説が作成せられたと彼の推定せるその言語を、彼は「アッカチャ」語と呼んだが、之は現在スメル語と呼ばれてゐる。近時の研究はスミスの如上の點に於ける所論の全般に於て正しい事を證してゐるが、然し幸にも其の他に、洪水傳説とギルガミシュの史詩の數種の異文或は校訂文が、前二千年頃既にスメル語とバビロニア語とに存し

（バビロニアの洪水傳説とギルガミシュの史詩（森））

た事を示すに都合好き十分なる證據が現存するのである。この發見は洪水傳説のバビロニア文の小部分が之に刻され、而もアミサツガの第十一年に相當する年、即ち前二〇〇〇年頃の日付のある土版の一片によつてであつた（1）。而して又フィラデルフィヤ博物館に或る土版の半分が藏せられてゐるが（2）之はもしも完全であるなれば、この傳説のスメル文の完全なる寫を含む事となるのである、その書かれたのは約同時代であるに違ひないのである。アミサツガの治世に書かれたこの土版の破片は特に重要なものである。その譯はその奥書によれば、この破片を含む土版はある一篇中の第二版のもので、且つ此の篇はギルガミシュの史詩篇ではないので、吾々は之からして前二〇〇〇年頃に於いては、洪水傳説はアシュル・バニ・バルの治世又はその以前に於ける如く、ギルガミシュの史詩中の第十一版を構成してはゐなかつたことが知られるからである。スメル文も他の見地からではあるが等しく重要なものである。それはその前述の土版の半分に残つてゐる部分の内容及び位

（二三）

置から推して、既にこの古い時代に、スメル語で一般に流布した洪水傳説の數種の異文が存在した事が明であるからである。即ち洪水傳説は當時既にメソポタミヤに於いて頗る古くから行はれたものなので、史生等は原文を隨意に増補或は要約して、さらにその中に記された事件を、地方的なる或は通俗的な嗜好、傳説、偏見に従て取り扱つたのであつた。スメル文はセム文のものよりも古いものであるとか、後者は前者から譯出せられたものであるとか云ふ事については、決定的の證據は存しない様であるが、恐らく、スメル人もセム人も、各々その獨自の方法を以て傳説を通じて兩民族に洽く知られてゐる比類なき程の大規模なる戰慄を禁じ得ぬ、悲慘事を記念せんとしたのであらう。いづれにもせよ、スメル人は洪水を以て、日時を正確に附し得られる歴史的事件として見たことは明白であつて、かく謂ふ所以はその土版のあるものには洪水前に位にあつた諸王の名簿が記せられてゐるからであるが、但し各王の治世に割當てられた期間の信じられないことは勿論である。

洪水傳説の中に記念された原事件は下バビロニヤに於ける多くの人命を奪ひ、財貨を破壊したる恐ろしき長期の氾濫或は大洪水であつたと推斷するも、恐らく過當ではあるまい。バビロニヤ文によれば、この氾濫或は洪水は降雨のために起つたのであるが、その傳文中のあるものの中の文章によれば、暴風雨の結果は大地に關連して起つた最も破壊的の物理的事變のために、更に一層悲慘なものとなつたことを暗示してゐる。ヘブライ人も又聖書によつて知ることを得る如く、この洪水の原因については二途の見方を持つてゐた。即ちその一に従へば、「四十日四十夜地に雨降り」(創世紀、七、十二)他の見方に従へば、「大淵フツの源總て」打ち破られ、「天の洪水の戸開かれし」(創世紀、七、十一)爲めに洪水が起つたとしてゐるので、この後者の觀察は降雨による洪水が海嘯を伴ふたことを示してゐる。更に一部バビロニヤ、一部ヘブライの史料に基づく後世の傳説は、この説を Cave of Treasures (紀元五世紀にエデッサ學林の人々によつて作られし有名な著作) の中で、次の如く謂つてゐる。即ちノアが箱船に乗り終へ、扉が閉された時、

「天の水門は開かれ、大淵は切れ／＼に裂かれ、」
又「大洋、全世界を圍む大海はその水を噴き、天の水門は開かれ、地の深淵は切れ／＼に裂かれ、大風の藏は開かれ、龍卷は猛り、太洋は吠え、その浪を洪水に注げり。」箱船は水先役の天使に水上を導かれ、カルドーの山(アルメニヤ)に着いて止つた時、「神、水に命じ給へば、水二つに分れぬ。上の水はその降り來し天の己が所に昇り、地底より昇り來し水は下の深さに歸り、」又「大海よりの水はその中に歸れり。」(大英博物館東方文書、第二五八七五號、一七葉一段、一八A葉一段及一段)洪水傳説の史實の基礎をメソポタミヤに見出さんと努めてゐる多くの學者は、この降雨による洪水は地震か海嘯のいづれかを、又は兩方を同時に伴つたものであるとしてゐる。疑ひもなく下バビロニヤの諸都市はスメル時代にあつては、現在よりも海に近かつたのであり、波斯灣頭は當時現在よりも遙かに深く灣入してゐたものであることは一般に承認せられた見解なのであるから、海嘯を伴ふた暴風の存した事は、現在知られてゐる傳説の如何なる形式のものに對しても、充分な根

據を與へるものである。吾々は今日に傳承せられた洪水傳説のスメル及びバビロニヤの諸種の傳文の内容を比較する時、此等が不完全のものであることを知るのであるが、就中この先史時代の船製造者のことを後世のバビロンの大神ベールの僧ベロンス程、よく脈絡ある詳細な記述をなしてゐるものがない所を見ると、メソポタミヤの史生はこの傳説を要約した儘の形で謄寫することを以て満足してゐたものと思はれる。尤もベロンスはアレクサンダー大帝の治世以後の人であるので、彼の記述は最も古い典據であると云ふを得ないが、彼は博識であり、バビロニヤ語を知り、その國の古文に精通し、バビロニヤの歴史を書いてをり、此等は歴史の幾多の斷片は博學者と言はれたアレクサンダー・コルネリウス、エウゼビウス及び其他の人々の著書の中に於て現在に傳へられてゐる。次に掲げたのはカルチャ人の第十王、キストルスの時代に起つた洪水を記述した斷片の譯文であつて、すぐその後に掲げたニネヴェ出土の土版に記された洪水傳説の翻譯文と之を比較することは重要

である。

(1) Schell により發表せる。Maspero's *Recueil*, vol. xx.

P. 55 ff. 參考。

(2) 正文は A. Poebel により轉寫、註解等を附して發表せる。(Historical Texts, Philadelphia, 1914 及び Historical and Grammatical Texts, Philadelphia, 1914.)

九、ベロソスの記述せる洪水傳説

「アルダテスの死後、その子キストルス位にある事十八サリ、彼の時に大洪水起れり。其の歴史は下の如し。神クロヌス、幻のうちに王に現れ、ダエシウス月の十五日に、洪水起り、之によりて人類は破滅せしめられんと戒め、且つ此等一切のこの發端、經過、終末の歴史を記し、之をシッバラの太陽の町に埋め、且つ船を作り其の友、親族等を之に伴ひ入れ、日常の生活必需品を積み、あらゆる種類の動物、鳥をも獸をも乗せ、更に大淵に行くとも神クロヌスに頼りて恐るることなき様命じたり。王何處に航行すべきやを神に問ひしに、神クロヌス答へて曰く、『諸々の神の許へ』と。かくて、王は之に人類の幸福の祈を捧げ、次いで

神の戒を守り、長さ五スタヂヤ、幅二スタヂヤの船を作り、之に豫て用意し置ける總ての品を入れ、最後に其の妻、子、其の友等を乗せたり。洪水大地を悉く被ひ了り、馳て水減ずるに及び、キストルス船より鳥を放てるも、食物も又足をどどむる場所をも見出さざれば、船に歸り來れり。數日の後、再び此の鳥を放ちしが、この時は鳥の脚泥に汚れて歸れり。更に三度、この鳥を放てるに、歸らざりき。爰に於て王大地の水上に現れしを判ぜり。かくて王船に窓を開け外を見るに、船ある山の中腹に打ち上げられしを知り、直に船を出でてその妻、娘、水先案内を連れて之に上れり。キストルス其の時、大地を讃め、祭壇を設け、諸神に犠牲を捧げ、而して船より共に出でし者等とその姿を隠せり。船に留りし者、その友の歸らざるを見て、船を出で多くの哀歌を唱へ、絶えずキストルスの名を呼びしに、王の姿は遂に見えざりしも、彼等はその聲を空中に聞けり。即ち王の彼等に祭の勤を果すべき事を勧むるを聞き得たり。又王は己が變じて神々と共に生くるに至りしはそ

の信仰の厚きによりしこと、又その妻、娘、水先案内も同様の名譽を得たることを告げ知らせたりき。且つ又、王は彼等にバビロニヤに歸るべきことを附け加へ、又シッバラにある書き物を搜し、之を人類に知らしめん事を命じ、且つ彼等の今居る所はアルメニヤの地なることを知らせぬ。残されし者は此等の王の言葉を（天に）聞き、神々に犠牲を捧げ、廻り道してバビロニヤへの途に登れり。」（Cory, *Ancient Fragments*, London. 1832. p. 26 ff.）

十、英雄ギルガミシュに、神々より永生を受けし彼の祖ウタ・ナビシュチムの語りしバビロニヤの洪水傳説

後に掲げた洪水傳説の一形式は、エレク市の初期の王ギルガミシュの生涯と功業とを記した、ニネヴェのネボの文庫の十二の土版の篇中の第十一版中に見出された所のものである。前述の如く洪水傳説は實際にはギルガミシュの史詩とは何の關係をも持たないもので、比較的後なる時期に、恐く

バビロニヤの洪水傳説とギルガミシュの史詩（森）

はアシュル・バニ・バルの治世（前六六八—六二六）中に、この史詩の編輯者によつて、その中に挿入せられたものである。このギルガミシュ篇の他の土版に記せるものの梗概はこの小誌の後半に掲げて置いたので、爰には次の事を述べればよいのである。即ちギルガミシュはその水魚の友で且つ侶伴たるエンキヅの死によつて痛く畏れを懷き殆んど失神せんとしたので、自分自身の死を如何にして逃るべきかと深く思案に耽り、その遠祖ウタ・ナビシュチムが不死の身となれることを想ふて、彼より不死の祕法を學ばんと、その住む所に向つて出發するに決心し、ウタ・ナビシュチムの住む所への道を夢に示されて、ギルガミシュは「日没の山」へ向けて出發し、苦難困憊を極めて、ある廣々たる海の岸邊に來たり、此處で彼はウタ・ナビシュチムの舟人、ウル・シアナビに遇ひ、之を説いてその船に乗させて「死の海」を渡らせ、遂にウタ・ナビシュチムの國の岸邊に上陸した。ウタ・ナビシュチムは岸に來て、此の新來者に其來訪の目的を問ひしに、ギルガミシュは彼の大の親友、エンキ

ゾーの死せる事、又自らの死を免れて不死の身たらん事の切なる望を告げた。ウタ・ナビシュチュムはギルガミシュに向ひて彼の考ふる所では死の避け難きものなることを示さんとするものゝ如き數言を言ひ、且つ

一、ギルガミシュ、ウタ・ナビシュチュムに、遠祖ウタ・ナビシュチュムに言へり。

二、「ウタ・ナビシュチュムよ、我汝を見るに、

三、汝の容貌變ることなし、猶我のある如く汝も亦然り。

四、誠に汝の身邊一つも變ることなし、猶我のある如く、汝も亦然り。

五、戦ひせんと「我が」心「動く」(も)、

六、「(も)汝は安かに仰向きて寝ねたり。

七、「凡そ如何にして汝は神々の群に加りて生命を見ることを得しや。」と。

それよりウタ・ナビシュチュムはギルガミシュに洪水傳説を述べた。

第十一版は次の如く、續けられてゐる——

八、ウタ・ナビシュチュムは彼、ギルガミシュに告

げたり。

九、「げにギルガミシュよ、我汝に隠れし祕密を顯はさん、

一〇、「それに神々の祕め事を汝に告げん。

一一、「シリツパクは汝自が知る町にして、

一二、「ブラッチ(ユウフラテス)河の「岸」に存する所なるが、

一三、「此の町は(由來)古く、神々の中に「住み給ひき」——

一四、「此の神々の心は大いなる神々を誘ひて、暴風雨を起さしめき、

一五、「彼等の父アヌ、

一六、「彼等の助言者、戰士エンリル、

一七、「彼等の傳使エン・ウルタ、「及び」

一八、「彼等の君主エヌギ。

一九、「ニン・イギ・アザグなるエアは彼等と共に「會議の席」にありて、

二〇、「彼等の言葉を蘆をもて葺ける家に知らせたりき。「蘆の小屋に寝たるウタ・ナビシュチュムに語れるエアの第一の言葉」

二、「オ、蘆の家よ、オ、蘆の家よ、オ、壁よ、オ、壁よ。」

三、「オ、蘆の家よ、聽け。オ、壁よ、悟れかし。」

三、「オ、シュリツバク人よ、ウバラ・ツツの子よ。」

四、「家を毀ち、舟を作り、

五、「財を棄てて、生命を求め、

六、「所有を捨てて、汝の命を救ひ、

七、「あらゆる種類の穀物を舟に積みめよ。」

八、「汝の作るべき舟は、

九、「その容積を計り、

十、「幅及び長さを同じくすべし。」

十一、「大洋……之に屋根を設くべし。」

十二、「エアに對するウタ・ナビシュナムの答」

十三、「我之を悟り、主エアに言へり、

十四、「汝の命ぜる事は、主よ、「我之を解せり」

十五、「我は大なる尊敬を以て之を見、又之を行はん。」

十六、「されど、我は町に、群集に、年長者に、何

を告ぐべきや。」

「エアの第二の言葉」

一、「エアその口を開きて、語り、

二、「その僕たる我に曰へり、

三、「……汝かく彼等に告げよ、

四、「神エンリル我に惡意を抱き【たれば】

五、「我、このうへ、汝の町に止るを得ず、

六、「又我が面を向後エンリルの地に向くる事あらじ、と。」

七、「我海に入りて、主エアと住まん。」

八、「されど、彼は汝等に富を雨の如く注ぎ、

九、「鳥の獲物、魚の獲物、

十、「……【豊かな】收穫、

十一、「……暗黒の君主(?)」

十二、「……荒き颶風を【汝等の上に加へんと】するならん。」

「舟の建造」

十三、「【夜明け】そむるや否や……

(四語行は破損)

十四、「弱き【人】……瀝青を持ち來り、

英、「強き「人」……必要なものを持ち來れり。」

五、「五日目に、我舟の設計圖を決したり。」

六、「圖に従へば、四方の壁の高さは十ガル（即ち二三キユビット）」

五、「又その屋根の周圍各均しく十ガルなり。」

六、「かくて、我船體の寸法を測りて之を設計し(?)、

六、「我之を覆ふ(?)事六度なりき。」

六、「我その外側を、七個に仕切り、

六、「我その内側を、九個に仕切り、

六、「我水栓をその真中にさせり。」

六、「我操舵柱を用意し置き、之に要するものを附し、

六、「我六ザルの瀝青を内壁に注ぎ、

六、「我三ザルのちやんを内部に注ぎ込めり。」

六、「荷を運ぶ人々三ザルの油(を持ち來れり)」

六、「別に、犠牲に費す一ザルの油、

七、「それに舟人の隠す二ザルの油とを、(持ち來れり)」

七、「我「働き」人に牛を屠り、

七、「羊を日に殺せり。」

七、「麥酒と胡麻酒と油と葡萄酒とを

六、「我れ人々に川よりの水の如くに飲ましめたり。」

七、「我れ祭の日を祝ふ事元日の如くにしたり。」

六、「我れ「香油の箱」を開き、塗り油の中に手をつけたり。」

七、「日の入る前に、舟は成就せり。」

六、「……の「爲め」……難かりき。」

六、「舟作り等は舟の……を、上に下にと持ち來れり。」

六、「其の三分の二を……。」

〔舟への荷積〕

八、「我もてるもの總てを之に(即ち舟に)積みめり。」

八、「我もてる總ての銀を之を積みめり。」

八、「我もてる總ての黄金を之を積みめり。」

八、「我もてる總ての穀物を之に積みぬ。」

八、「總ての我が家族と縁者を舟に入らしめ、

八、「我野の柔順なる獸と、又猛き獸と、總の工

匠を之に入らしむ。

八七、「神シャマシユ我に時を教へて（かく言へり）、

八八、「夕暮に、『闇の力』は洪水を起す雨を降らせん、

八九、「其の時、舟に入り、扉を閉ぢよ、と。

九〇、「示されし時は近づきぬ。

九一、『闇の力』は夕暮に洪水を起す雨を降せぬ。

九二、「我暴風雨の來るを見守りしが、

九三、「之を見て、恐懼^{オソレ}我を捉へぬ、

九四、「我れ舟に入りて、扉を閉せり。

九五、「舟の水先き案内者、舟夫ブズル・ベール（或はブズル・アムリ）に、

九六、「我大なる家（即ち舟）と其の中味とを委ねたり。

「アブブ（颶風）とその荒れし有様」

九七、「曉の光、空にさしそむるや、

九八、「天の基より黒雲出でぬ。

九九、「其の中に神アダド（ラマヌ）雷鳴し、

一〇〇、「神々ナブーとシャル（即ちマルヅク）その前驅をし、

一〇一、「高地、平原を超えて傳使となりて進み、

一〇二、「イラガル（ネルガル）は舟の柱を破り、

一〇三、「エン・ウルタ（ニニブ）は出でて、暴風雨を下せり。

一〇四、「アヌンナキ（南天の星神達）は彼等の炬火を振り、

一〇五、「その光をもて、地を照せり。

一〇六、「アダドの龍卷（即ち颶風）は天に巻き上りぬ。

一〇七、「全ての輝きは消へて暗となりぬ。

一〇八、「……地……恰も……之を荒廢せしめしかの様。

一〇九、「一日中「洪水は降りぬ」……

一一〇、「速かに之は昇り……「水は」山々に達し、

一一一、「水は人々に迫る事戦争の如し。

一一二、「兄弟はその兄弟を見ず。

一一三、「人は天に知らるる（又は認めらるる）事あるまじ。

一一四、「神々は颶風に懼れ、

一一五、「彼等は飛びてアヌの天に昇り、

二六、「神々は犬の如くに蹲り、壁の側に縮まりぬ。」

二七、「女神イシュタールは産褥にある婦女の如くに泣き叫べり。」

二八、「神々のこの女神、大聲に悲しみ歌ひて『曰く』」

「イシュタールの悲嘆」

二九、「誠に是れまでの天の配劑は覆へされて泥土となりぬ。」

三〇、「我神々の群の中に惡を命じたればなり。」

三一、「我わが神々の群の中に惡を命ぜし折は、

三二、「我わが人民の破壊の爲めに戰爭を命ぜしなり。」

三三、「いかで我自ら我が人民をかりて、

三四、「小さき魚の海に満てるが如くせんとすべきや。」

「ウタ・ナビシュチムの物語の續き」

三五、「アヌンナキの神々彼女神と共に哭きぬ。」

三六、「神々は身を屈め、座して泣きぬ。」

三七、「その唇は(悲嘆に)堅く閉されぬ……」

二六、「六日六晩、

二九、「暴風雨は猛り、颶風は地上を荒れ狂ひぬ。」

「暴風雨衰ふ」

三〇、「七日目に近づける時、颶風と猛りし洪水は止みぬ。」

三一、「——げに、その荒れ狂ひしこと軍勢の如かりき。」

三三、「海靜まり、水は退き、颶風と豪雨は止みぬ。」

三三、「我海を見渡すに、既に風ぎ

三四、「總ての人々は變じて泥土となりぬ。」

三五、「大地は段丘の如く平になりぬ。」

三六、「我空氣拔を開けしに、光我が顔にさせり、

三七、「我身をかがめ、坐し、且つ泣きぬ、

三八、「涙下りて我が頬を濡せり。」

三九、「我首を廻らして、世界の四方——海をば見たり。」

四〇、「十二日の後、島影現はれぬ。」

四一、「舟は進路をニシルの地にとりしに、

四二、「ニシルの山舟を捉へて動かさず。」

四三、「第一の日、第二の日を経るに、ニシルの山

舟を捉へて動かさず。

一四、「第三の日、第四の日を経るにニシルの山舟を捉へて動かさず。

一五、「第五の日、第六の日を経るにニシルの山舟を捉へて動かさず。

一六、「第七の日に及んで、

一七、「我れ一羽の鳩を取り出し、之を放ちぬ。

一八、「鳩飛び去りて「やがて」歸り來れり。

一九、「そはその脚を休める所なければ歸り來れるなり。

二〇、「我れ一羽の燕を取り出して之を放ちぬ。

二一、「燕飛び去りて「やがて」歸り來りぬ。

二二、「そはその脚を休める所なければ、歸り來れるなり。

二三、「我れ一羽の大鵝を取り出して、之を放ちぬ。

二四、「大鵝飛び去りて、水の次第に減ずるを見、

二五、「そは餌を食ひ、地を喙さ、ああ、と鳴きて、歸らざりき。

「ウタ・ナビシユチュム舟を出づ」

パピロニヤの洪水傳説とギルガミシュの史詩（森）

二六、「此處に於いて我總ての物を四方に取り出して、犠牲を捧げ、

二七、「我此の山の嶺に酒を注げり。

二八、「七個宛我器を並べ、

二九、「その下に蘆、杉、みつるす(?)を積みぬ。

三〇、「神々その香を嗅ぎ、

三一、「神々その甘き香を嗅ぎ、

三二、「神々犠牲を捧げしものの上に蠅の如く群れ集りぬ。

「神々の女神イシュタールの言葉」

三三、「此の時、神々の女神近づき、

三四、「女神はその願によつてアヌの作りし價高き寶玉飾を差し上げて「曰く」

三五、「オ、此處にある汝等神々よ、我は我が首の瑠璃の玉飾を忘るる事なきが如く、

三六、「我は此等の日を常に想ひて、忘るる事あるまじ。

三七、「神々を捧げものに來らしめよ、

三八、「されどエンリルを捧げ物に來らしめる勿れ、

一六、「そは彼は評議を待たずして颶風を起し、
一七、「且つ我が人民を滅亡に渡したればなり」
と。

「エンリル(ベール)の怒り」

一七、「此の時エンリル近づき、

一七、「彼は舟を見たり。次いでエンリルは憤り、

一七、「且つ彼は神々、即ちイギギ(北天の星神達)に

對し、怒に満ちて「曰く」

一七、「如何なるものが身を完うして逃がれ出で
しや。

一七、「破壊の中に一人すら生き長らへるを許さ
れず」と。

「エン・ウルタの言葉」

一七、「其の時、エン・ウルタ其の口を開き語りて、

一七、「戰士エンリル(ベール)に云へり。

一七、「神エアの他に、誰か計畫を爲し得んや。

一七、「神エア、總てを知る。

一八、「彼口を開きて語り、

一八、「戰士エンリル(ベール)に云へり、

一八、「オ、神々の中の君主、汝戰士よ、

一八、「評議を待たずして、汝如何にして、颶風を
起すを得しや、

一八、「罪あるものにはその人の上に罪を置き、

一八、「掟に叛くものにはその人の上に彼の罪科
を置くべし。

一八、「されど、「總てのもの悉く」滅ぼされざる様
慈みあれ、

「人をして悉く滅び去らしめざる様」忍耐強
くあれ。

一八、「汝颶風を起さずとも、

一八、「獅子來りて人類を滅すべし。

一八、「汝颶風を起さずとも、

一八、「狼來りて人類を滅すべし。

一九、「汝颶風を起さずとも、

一九、「饑饉起りて大地を「荒廢」せしめん。

一九、「汝颶風を起さずとも、

一九、「ウラ(ヘストの神)起りて、大地を「荒廢」せし
めん。

一九、「我にありては、我大神等の祕め事を知らせ
し事なし。



ニネヴェの遺蹟平面圖

この圖は、ニネヴェの城壁、寺院、王宮並にカウル河流と東部城壁外の大なる壕を示す。南方の土丘(ナビ・ユヌ)はサルゴン二世、センナケリブ及びエサルハドンの建築せし王宮その他の遺蹟を含み、北方の土丘(クニーンジク)はアシユル・パニ・パルの王宮及び文庫並にネボの文庫等のそれを含む。(故フェリックス・ジョーンズ氏製圖)。

一六、「我アトラ・ハシスに幻を見せ、かくて彼神々の祕め事を聞けり。

一七、「されば、彼を會議を開きて審すべし。

「エア、ウタ・ナビシ・チュムとその妻とに神の資質を與ふ」

一八、「かくて、神エア舟に上り、

一九、「彼我が手を捉へて、連れ出しぬ。

二〇、「彼我が妻を連れ出して、我が側に脆づかしめぬ。

二一、「彼我等二人の顔を向け合はしめ、彼は二人の間に立ちて、我等を祝福して「曰く」

二二、「ウタ・ナビシ・チュム、ささには人に過ぎざりしも、

二三、「今やウタ・ナビシ・チュムとその妻を吾等神々に均しきものとせしめぬ。

二四、「ウタ・ナビシ・チュムは遠く、諸河の口に住むべし、と。

「ウタ・ナビシ・チュムその洪水物語を了る」

二五、「茲に於いて、彼等は我を遠くの場所に連れ行き、諸河の口に住はしめたり。」

ギルガミシュの史詩の第十一版の正文の以上のものの残りは、後に記する事とする。(以下次號)

森

馨